

<書 評>

ロバート・ハイルブローナー 著 『21世紀の資本主義』
中村達也・吉田利子 訳

(ダイヤモンド社 1994年刊)

村 尾 質

1991年、旧ソ連が崩壊した。このことを予測したエコノミストも調査機関も、世界に全く存在しなかったと、著者R. L. ハイルブローナー (Robert L. Heilbroner) は指摘している。ソ連の崩壊は社会主義社会への期待を潰 (つい) えさせ、資本主義への期待を膨らませている (第四章の1)。そのような情勢の中で、資本主義は21世紀にはどうなるのか。そのシナリオを描こうとするのが、経済思想史家ロバート・ハイルブローナーによる本書である。

本書の末尾に述べられている結論は決して明快なものではない。それは問題自体の難解さに基づくものであろうが、本書全体としては、われわれが資本主義の将来を考えるための、何らかの手掛かりを与えてくれるものと考えられる。

以下まず本文の第I部で、本書の内容をやや詳細に紹介したあと、第II部において若干の書評 (筆者の抱いた疑問点を中心に) を試みたいと思う。

第I部 内容の紹介

日本語版への序文

本書はR. L. Heilbroner, *Twenty-First Century Capitalism*, 1992, の全訳書である。

著者は冒頭で、「日本語版への序文」として若干のコメントを与えている。その内容の紹介は省略するが、ハイルブローナーはそこで、「勝利につながる資本主義の戦略とは挑戦的課題に対して敏感に反応することである」と述べている。

第一章 歴史の中の資本主義

——歴史は何も教えはしないが、教訓を学ばない者を罰する

本書の中心課題は「資本主義が次の世紀にも世界を支配することが期待できるか否か」ということである。

この章では、3つの節にわたって、南部アフリカのカラハリ砂漠のクン族の社会 (「伝統を指針とする経済」)、計画経済の社会 (「指令経済社会」)、市場経済の社会、の3つの経済について比較を行った後、資本主義経済の特質について述べ、さらに第二章以下への問題提起を行なっている。

第二章 資本蓄積への衝動

1 資本主義とは何なのか

資本主義の最も顕著な特質は、自然発生的変化の傾向がきわめて強いということである。そこには発展的な推進力が働いている。その推進力を生み出すエネルギーの源は、前進し、金を儲け、資本を蓄積しようとする衝動である。

資本主義において特別の重要性をもつ「所有」という問題が存在する。不平等とは、生産手段の所有者と、生産手段を用いて働く者との間のそれ、つまり資本家と「彼らの」労働者のあいだの不平等である。この生産手段へのアクセスを拒否する権利こそ、資本主義における富のもつ中心的な便益である。資本主義のもとで個人の労働が指揮管理され、報酬を支払われるという「賃労働」制度がそこに生ずる。

2 ダイナミズムを生み出すものは何か

資本は、さらに大きな資本を生み出すというそ

の利用方法に由来する富である。

マルクスが資本の自己増殖と呼んだこのプロセスを突き動かしているものは何だろうか。エコノミストは際限のない増殖過程を「効用最大化」への欲望の反映だと言うが、これは「疑わしい」と著者はいう。「満足を“最大化”したいという漠然とした動機は、マルクスが「蓄積せよ！ 蓄積せよ！ これこそモーゼたち予言者のお告げである」と言ったことを説明するには不適切のようだ。「私の見るところ、資本を増やしたいという抑えがたい欲求は、帝国の際限ない拡大や王の神格化や崇拜へと社会を駆り立てたのと同じ欲望の現われと考えるほうが納得がいくのではないか」とハイムブローナーは主張する。

3 導火線となったローマ帝国の滅亡

紙数の制約で内容紹介は省略

4 資本蓄積の影響

同上

5 資本主義は両刃の剣

資本主義的蓄積過程ほど持続的な経済進歩を実現した社会的メカニズムは、ほかにはなかった。しかしマルクスが言うように、このプロセスを「バラ色」と見るのは単純すぎる。そこには「新しいかたちの社会的惨状」も生まれた。

資本主義秩序の「成長を成功と見てはならない」と同じく、その「不安定性を欠陥と見るべきではない」。そこでは成功とか失敗とかいう言葉はあまり役に立たない。「資本の蓄積が成功と失敗の両方をもたらす」というほうが適切だろう。「それが物質的福祉に欠かせないという意味では成功であり、不安定を含め、社会的悪影響をまぬがれないという意味では失敗である」。資本主義が資本主義であるかぎり、資本蓄積への衝動が活動の原理であるかぎり、「成功か失敗のいずれか一方というわけにはいかない」であろう、と著者は述べている。

第三章 資本主義の政治学

1 中心テーマは、経済と国家の関係

「階級闘争という考え方は、今日では時代錯誤の見当はずれのように聞こえる。だがマルクスの

見方は、そう簡単に退けていいものではない」。「資本主義の基本的な政治課題」は、すべて「階級関係」に関わっている。

一般的にあまり意識されない資本主義システムの独自性とは、社会秩序の支配原理が二つの分野（経済と政治）に分離していることである。「ときには経済問題に国家が介入しなければならない」と同様に、「経済問題が統治機能に侵入することも不可避」である。社会主義社会には「1つの領域しかない」。

2 二つの領域の衝動には密接な関係がある

資本主義の2つの領域は、政治活動の枠組みを形成している。この2つの領域は、別々の使命をもつにもかかわらず、密接な関係がある。「資本の領域は、国家の補完的支援がなければ蓄積を進められない」。一方、「政府が目標を達成するのに必要な資金のすべてを、健全な経済活動から得られる歳入に頼っている」ということである。

両者の関係は変化する。「19世紀半ば、どこの国の政府も」ブルジョワ階級と「利害をともにしていた」。現代ではその関係は再び変化した。野放しの市場による「増大する脅威から経済を守る役割を国家が担っている」。「国の主権が脅かされたときには、資本はたちまち救援にまわる」。「産業界が政府の支援に駆けつけるのは」、「愛国的な動機、それに利潤のゆえだろう」。「緊急時には産業が政府を背後から支え、緊急時と緊急時のあいだには、政府が産業を支える」。

3 資本の拡張が生み出した問題

現代資本主義の第1の問題は、「資本の経済的な手は、母国の政治的な手よりもはるかに遠くまで延びているということ」である。多国籍企業の超国家的な流れがそれである。資本主義の2つの機能（経済と政治）に「基本的な不均衡が生じはじめ」、そこから「治癒策のない不安定というリスクが生まれている」のである。

4 ケインズ経済学が与えた政府の責任

1930年代はいくつかの国において、資本主義が重要な根本的変化を遂げた時代でもあった。民主主義国家において、「完全雇用」の達成に努力するという新しい国家の「義務」が加わったのである。

ケインズ政策による「投資の社会化」に基づく完全雇用の実現と福祉国家の成功そのものから、「新しい挑戦課題」が生まれた。労働者の社会的地位が変化し、労働者は「未組織で受動的な集団」から、「よく組織化され、戦闘的な姿勢で賃金交渉に臨む集団へと変身」した。かくしてすべての先進国が賃上げによる「物価への圧力」を強く感じ始めた。

「インフレの昂進は、資本主義の政治に2度目の変貌をもたらした。システム拡大型の政治からシステム安定型の政治への明らかな転換」である。こうして国家は、「経済政策の第1目標としての完全雇用を放棄した」のである。「容認しうる」好ましい失業水準は、アメリカで上昇した（1960年代の2—3%から1980年代の5—6%へ）。同様の転換は、すべての資本主義国でもはっきりと表明された。

5 次に負わされたインフレ抑制の責任

戦後世界の第2幕目には、ケインズの保守主義的傾向がさらに明瞭になった。ケインズ主義の成功が慢性的なインフレにとって代わられるにつれ、政府のインフレ対策の影響は資本より労働者の側に厳しくのしかかった。しかしそれは政府の経済への介入を否定する純粹の保守主義ではなく、政府の責任を重視する保守主義である。

6 民主主義と資本主義経済

資本蓄積の衝動と自由の享受との間にはつながりがあるのだろうか。

この問題について、これを肯定的立場から主張するジョン・ロック、アダム・スミス、C. B. マクファーソンらの主張がここで簡単に紹介される。

ここで著者自身の見解が次のように述べられている。すなわち「自由にとっては、経済という飛び地のある社会秩序が必要なのであり、現在までのところ、そうした社会は資本主義のそれしか存在しなかった。「先進資本主義国と同じくらの水準の政治的、市民的、宗教的、知的自由を獲得した非資本主義国はない」という事実を指摘したい。私たちが「民主主義」と呼ぶ明示的な政治的自由は、これまで、資本主義経済秩序のある国

にしか存在しなかった」と。

「資本追求が自由を愛する心を生むことはないのはたしか」である。だが「政治の内側に経済という飛び地が存在するおかげで」、「体制の介入なしに反体制派が暮らせることが、自由の測り知れないほど大きな支えになっている」。「国家でも手が届かない私的領域の存在」は、「中立国スイスと同じような意味をもっている」と。

第四章 市場システム

この章では、先ずソ連の崩壊以来市場システムへの評価が上昇していることを述べる。

次いで「中央計画システムがうまく機能するかどうか」についての、有名なミーゼスとランゲの論争（1930年代）について紹介したあと、市場がときとして混乱する原因、外部経済の問題、商品化による疎外（マルクス）の問題、などが述べられている。紙数の制約上、詳細は割愛せざるをえない。

第五章 未来へのシナリオ

1 スミス、マルクス、ケインズ、そしてシュンペーター

21世紀の資本主義がどう展開するかを、予測というほど科学的ではないが、シナリオとして描いてみようと思う、とハイルブローナーは述べる。

偉大なエコノミストたちの大半は、資本主義の長期的な未来に対して悲観的なシナリオを書いている。アダム・スミスは運命の岐路をはるか未来、「私たちが生態学的に成長が阻害される日を考えてときのように遠くにおいていたらしい」。彼は「労働者の道徳的墮落が生じると予想」していたことを含めて、「エコノミストの中でもいちばん悲観的だったかもしれない」。彼の分析は資本主義の「衰退」、ヴィジョンは「それより早い荒廃の始まりを予想」していた。

対照的に、「マルクスは楽観的」であった。「資本主義に対してではなく、それが生む社会秩序について」である。スミスの「愚かで無知な」労働者階級が、マルクスにあっては、「混乱はしていてもゆっくりと理解を深めるプロレタリアートへの

道」をたどる。

ケインズは、市場原理で動く社会には「慢性的な失業が起こる」という立場から、分析的には悲観論、だが「均衡ある経済と均衡ある政治」の予想から、ヴィジョンでは楽観論であった。

シュンペーターは「創造的破壊という絶え間ない嵐」の観点から、短期的・分析的には楽観論者だが、ヴィジョンの面では悲観論者である。彼は「資本主義の文化がさまざまな価値を腐食させ」て「企業家が情熱を失い、社会主義的管理者の座に安住の地を見出してしまう」、という驚くべきシナリオを描いた。「社会主義のモラルと自覚は資本主義のそれより優れているはず」であり、「計画制度に対する疑念」は、「近視眼的な見方のせいである」と彼は言う。

2 分析とヴィジョンの相互作用

ここでは上述の各シナリオの違いを生み出す原因を中心として述べられているが、これも紙数の制約でカットせざるをえない。

3 資本主義にとって、ダイナミズムが最大の敵

前述のシナリオから引き出すべき1つの教訓は、ほぼ全員が資本主義を自己破壊的と考えたのはなぜかということである。資本主義秩序の信奉者であったスミスやシュンペーターでさえ、資本主義に穏やかな長期的未来を予想しなかったのはなぜか。経済学史上の偉人で、そうした未来を予想した人物が1人もいないのはなぜか。

みながそろって不安を抱いているのには、明白な理由が1つと、明白ではないが推定される理由が1つあると思う。明白な理由のほうは、「資本主義のマクロ秩序とミクロ秩序をうまく維持していくことが非常に困難だということ」である。そして推定される理由のほうは、資本主義の「政治的、倫理的正当性に対する後ろめたさ」である。

第1の問題については、意見はまったくばらばらである。だが「共通する要素」は、自己規制メカニズムの「変動性が大きい経済システムに固有の不安定性」である。その「ダイナミズムそのものがこのシステムの最大の敵」でもある。

第2の問題、すなわち資本主義の政治的、倫理

的正当性について、広範な不安が存在する。アダム・スミスはこの潜在的な問題を意識していた。ハイルブローナーはいう。「労働者」は「使用者とともに働いているのに」、使用者には「賃金ではなく“利潤”が支払われる」(訳書では「その使用者にも賃金が、しかも労働者より高い賃金が支払われるというかたちにならないのはなぜだろうか」となっているのは、上記の意味(賃金ではなく利潤が支払われる)においてである——訳者中村達也氏の、筆者への説明による)のはなぜだろうか。「あるいは利潤が生まれるとしたら、なぜ両者すべてにそれが平等に分配されないのだろうか」、といった疑問、後ろめたさである。「この問題を資本主義研究の中心に据えたのはマルクスである」。

スミスが指摘した問題は「エコノミストの喉に突き刺さった」。多くの経済学者のどの説明も、利潤は生産に対する資本の貢献への報酬であって、労働の貢献に対する報酬が賃金と呼ばれるのと同じことであると述べている。そこで「見過ごされているのは、利潤が、労働者が振るうツルハシやシャベルに対する報酬だという性質」である。「資本の得る所得」は、これを使用する者でなく、「所有している者に支払われる」。これは資本主義の所得分配の倫理的基盤を正当化したいと思う者には、深刻な問題を突きつける。

生産手段の私的所有につきものの不平等にまつわる倫理的問題を、ケインズは「回避」し、シュンペーターは「言い抜け」ている。資本主義に対する長期的な見通しが「等しく悲観的」であるのは、この「倫理的な後ろめたさのせい」ではないかと思われる。

4 21世紀資本主義の可能性

「資本主義が問題解決に成功する方策は、それぞれの資本主義国の政治的能力によってさまざま」であろう。どんな資本主義が成功する可能性が大きいかを予想するなら、「高度の政治的現実主義」を持ち「イデオロギー的な熱気の低い」こと、「公共サービス」が行きとどき、「大衆の一体感が伝統的に強い」といった特徴をもつ資本主義国だろうと思う。成功する資本主義はすべて、「労働者には雇用と所得の安定」を、「経営者には効率

向上のための問題解決の権利」を、「政府には成長の調整役という正当な役割」を保障しているであろう。

もっと長期的な帰結となると、「予測の可能性はさらに小さくなる」。「内部から発生する2つの恐るべき問題が、資本主義世界を揺るがすことはまちがいない」。1つは「生態学的障壁」(地球の温暖化とオゾン層の破壊など)である。この障壁は工業的成長を抑止する必要があることを意味し、先進国と後進国とのあいだで争いが起こるだろう。第2の問題は「各国政府の防御力を上まわるスピードで進行しつづける資本の国際化」である。

「適応力の高い資本主義国は問題に効果的に対応するだろう」が、「機能不全が超国家的な規模で起これば、対策もまた超国家的な政治的対抗勢力を必要とする」。しかしながら「そのような勢力は存在しない」。そして「市場原理の有効性」が危うくなれば、「資本主義秩序そのものの歴史的有効性が試練にさらされる」。これらの問題については「分析」ではなく、「ヴィジョンだけがシナリオを描ける」と言うことである。

5 資本主義を超えたところに何かがあるか

ソ連が崩壊するまでは、「市場を放棄して計画システムを採用し、思いやりのある方法で、円滑かつ知的に経済活動を社会的ニーズの充足に導くような決定的変化が生じるだろう」と、多くの人々が考えていた。しかしその期待は、ソ連帝国の崩壊とともに崩れた。にもかかわらず、私は資本主義後の秩序として中央計画体制を除外したくない。絶望的なほど貧しい国にとっては、ある種の「戦闘的な社会主義」が魅力をもつだろう。「生態学的脅威や世界資本の力」に対して組織再編と防衛が必要になれば、「厳格なものではない計画」も、一部の先進国システムとしては有効だろう。こうした「歓迎すべき中央計画が、歓迎できない政治的中央集権化をもたらさないためには、私的領域という名の国家の中のスイス(前述 p. 81, 右段 2.7 参照)がどの程度の規模で存続するかがかなり重要」となるだろう。

もう少し寛容な社会主義、「市場型社会主義」はどうか。その見通しはかつてほど明るくないだろ

う。スウェーデンのように社会主義的資本主義を追求してきた国は、「資本蓄積の必要性和、平等という社会主義的目標追求との矛盾によって、袋小路にはまりかけている」。スウェーデンは「人間の顔をした資本主義の明るい例」であり、「近い将来も適応によって生き延びることのできる資本主義だと思ふ」。しかし「あまり成功しているとはいえない現在の状況から前進できると予想するのは非常にむずかしい」。

それではスウェーデンを超える道はあるのだろうか。興味深い可能性の1つが最近示唆されている。それは「参加」を統合原理とする社会である。経済活動のすべての段階で、すべての市民が討議と投票によって集団的意思決定に参加するのである。

そうした社会秩序は機能するだろうか。それが円滑に機能するためには、「市場に似た調整メカニズムが必要」だろう。単調で楽しくない仕事をする労働力が定期的に供給されなければならない。個人の反社会的な目標追求を抑制する必要もある。

21世紀の社会はこの方向に向かうのだろうか。「私は、そうは思わない」。移行は非常に難しく、社会の再構成は非常に複雑である。これほどの革命的な変化が短期間で起こるなら抵抗もきっと激しいだろう。参加型社会は「21世紀の社会秩序とはならないと思う」とハイルブローナーは述べている。

しかしながら「思想はそれ自身生命力をもつ」。参加型社会の思想や理想は、資本主義をできるだけ長く機能させようとして苦闘しているあいだは、大いに役立つにちがいない。「そのことを想定して別の社会的目標(つまり「参加型社会」、あるいはそれとは別の?——筆者注)を設定しておくことは、けっしてむだではあるまい」とハイルブローナーは本書を結んでいる。

第II部 書評

ここでは本書の内容に対する疑問点を中心に述べたい。

1 資本の自己増殖を突き動かす原動力は何か

本書第2章「資本蓄積への衝動」の「2 ダイナミズムを生み出すものはなにか」の節で、ハイルブローナーは、資本主義秩序における、マルクスが資本の自己増殖と呼んだプロセスを突き動かしているのは何だろうか、と問いかける。彼は、エコノミストは「際限のない増殖過程を“効用最大化”への欲望の反映だという」がそれは疑わしいとしている。満足を最大化したいという漠然とした動機は、マルクスが「蓄積せよ！ 蓄積せよ！ これこそモーゼたち予言者のお告げである」と言ったことを説明するには「不適切なようだ」と言う。そして「私の見るところ、資本を増やしたいという抑えがたい欲求は、帝国の際限ない拡大や王の神格化や崇拜へと社会を駆り立てたのと同じ欲望の現れと考えるほうが納得がいくのではないか」と述べている。

ハイルブローナーのこの叙述は、私には理解し難い。「効用最大化」や「満足の最大化」は、個人的消費者の行動基準としては充分であるとしても、資本蓄積衝動の根拠としては不適切であることは、彼の言う通りである。しかし彼のいう「帝国の拡大」はともかくとしても、「王の神格化」追求といった衝動が、資本蓄積の衝動と同質のものとは考え難い。私の考えとしては、もっと単純に、資本蓄積を突き動かす原動力として、市場競争のうち勝つためには資本蓄積が不可避免的に要求される資本の客観的存在条件と、私的利益の不断の増大という資本家一般の欲求、の2つを考えれば良いのではないか、と思われる。

2 資本主義の問題点を十分に指摘しているか

ハイルブローナーが指摘している資本主義固有の問題点は、およそ次の4点である。

まず第1は、資本主義のもつ固有の「不安定性」である。それは資本主義固有のダイナミズムに起因するものであるが、この点については前述の本文第I部（原著第5章の3の前半部）において述べたので説明は省略する。

第2の問題点は、資本の「文化への影響」である。それは生産物がすべて販売というかたちをとるため、公共財がみえなくなって経済への見方が

歪むこと、さらに商品化による疎外（マルクス）によって、そこで何が失われたかが見えなくなってしまうことである。この問題については原著第4章の4の後半部において触れられている。

彼が指摘する資本主義の第3の問題点は、「市場の好ましからざる影響」、すなわちいわゆる「外部性」の問題である。これは現代では公害問題であろう。この問題は原著の上記と同じ節の前半部で述べられている。

さらに第4の問題点として、「資本主義の倫理的基盤」に対しての「不安」が挙げられている（原著第5章の3の後半部）。これはきわめて興味ある問題提起であり、21世紀の資本主義を考える場合に避けては通れない問題であろう。

おおむね以上の4点が、ハイルブローナーの考える資本主義成立以来の（現代的な新しい問題は別として）固有の問題点であると考えられる。しかし果たしてこれで充分といえるであろうか。私にはもう1つの重要な問題点が忘れられているように思われる。それは資本主義成立以来の古典的問題点である。すなわち所得配分の不公平という問題である。たしかに現代の先進資本主義諸国の内部においては、この問題はかなりの程度解消していると考えてよいであろう。しかしながら途上国を含めて考えるなら、問題は違った様相を帯びてくる。途上国内部での所得配分の不公平の存在、そして途上国と先進国との所得格差の問題である。とりわけ後者の問題は、そこに先進諸国による収奪的要因もあると考えられるから、これは21世の資本主義にとっての、中心的な問題点の1つと考えなければならない。それは前述の「資本主義の倫理的基盤への不安」とも関連する問題であろう。

3 経済という「飛び地」の存在が、常に「自由」の大きな支えとなりうるか

原著第3章「資本主義の政治学」の「6 民主主義と資本主義経済」の後半部において述べられている問題である。1つの社会に経済という「飛び地」が存在することによって、それが中立国スイスの存在と同様の効果を発揮して、その社会の自由が守られると考えることは本当に正しいのであ

ろうか。ハイルブローナーはこの点についてかなり楽観的に見えるが、戦時の日本やドイツでの歴史を見ると、それはあまりにも楽観的であるように思われる。日本にもドイツにも、明らかに強力な経済が存在した。問題は「経済」が存在することではなく、経済が政治的な「飛び地」になりうるかどうか、という問題であろう。それが実現するのは、すでにそこに「民主主義」が存在するからこそであろう。多くの資本主義国が自由を維持し得ているのは、経済を、政治的「飛び地」にする民主主義が存在しているからであると私は考える。ハイルブローナーの考え方は、原因と結果を逆にしているように思われるのである。

4 21世紀は「参加型社会」になり得ないか

この問題についてハイルブローナーは、第5章の「5 資本主義を超えたところに何があるか」の後半の部分で論じている。そこで彼は、「市場型社会主義」の見通しは「かつてほど明るくはないだろう」として、スウェーデンのような「社会主義的資本主義」の将来についても、「現在の状況から前進できると予想するのは非常にむずかしい」とする。そのうえでハイルブローナーは「スウェーデンを超える道」として、「参加型社会」の問題を提起しているのである。

しかしながら彼は、21世紀における参加型社会の実現について、「移行は非常にむずかしく」、21世紀の社会はこの方向に向うとは思われないと否定しながらも、その「思想や理想」は、資本主義における1つの追求目標として「役立つ」であろうという意味のことを、やや難解で晦渋な文章ながら、1つの期待をこめた言葉をもって述べ、本書の叙述を閉じている。

ところでハイルブローナーが主張するように、21世紀は「参加型社会」にはなりえないのであろうか。さきにも触れたように、旧ソ連の崩壊を予測したエコノミストは存在しなかったことを想起すれば、この問題の予想の難しさも容易に理解できる。たしかに21世紀初頭までに「参加型社会」が実現すると考えるのは、人類の政治と経済の現状から考えて無理であろうと思われる。しかしな

がら「参加型社会」の実現は、現代人類の1つの普遍的願望であると考えることが許されるとすれば、筆者としては、希望的観測をも含めて21世紀を考えるとき——20世紀の経済において資本の所有と経営の分離が実現したように——21世紀100年の間に、経営内部における意思決定について革命的な変化、換言するなら企業内における普遍的な「参加」の実現（資本の所有には手を加えないで）の可能性、を期待してもよいのではないかと考えるのである。

5 総括

以上を総括すると、ハイルブローナーは21世紀の資本主義をどのように考えているのであろうか。

まず言えることは、政治的に民主主義を維持するためには、資本主義秩序であることが望ましいとしていることである。この点については筆者も異論はないが、上記3で指摘したことを含めて、ハイルブローナーはいささか楽観的にすぎるように思われるのである。資本主義社会になれば必然的に民主主義と自由が維持される、という保証はないのである。ただ社会主義よりは相対的にベターであるということであろう。

資本主義の経済的側面についてのハイルブローナーの考え方は、資本主義のもつ不安定性、文化への悪影響、倫理的基盤への不安などいくつかの問題点が存在し、古来からの偉大な経済学者のほとんどが、資本主義秩序の将来を悲観視している（第5章の1参照）にもかかわらず、人間側の対応によってなんとか事態を切りぬけていけると考えているように思われる。結論的に言うなら、政治と経済を総合してハイルブローナーは、21世紀の社会秩序として——明確なことは何も言っていないが——「参加型」の要素を追求し続ける資本主義を想定しているのではないかと推定されるのである。

ここで筆者の意見を述べさせていただくことにしたい。

ソ連社会主義の崩壊によって、人類の一部にとっての理想であった社会主義社会は夢泡と化した、と考えられる。それでは21世紀の人類の未来

を、いかなる社会に託することが考えられるのであろうか。資本主義か、それとも他の未だ知られざる社会なのか。それが社会主義社会ではないことは今や人類共通の認識といって良いであろう。では21世紀は資本主義社会でよいのか。だが資本主義にもさまざまな害悪があることは、本書第4章および第5章に述べられている通りであり、また古来の偉大な経済学者たちのほとんどが、資本主義経済の未来に対して悲観的な分析ないしヴィジョンを抱いている（第5章の1参照）。これに代わる社会はある得るのか。

私の考えでは、人類にとって重要なことは、「資本主義か、社会主義か」という問題ではなく、「民主的社会であるか否か」という問題なのではないであろうか。人類の歴史を顧みるとき、すくなくとも封建社会より資本主義社会のほうが、民主的であるとみてよいであろう。資本主義の歴史的（政治的）役割の一つはそこにあったと考えることが許されるであろう。現代の社会主義社会は、経済的な失敗もあるが、民主主義社会を造り得な

かったことが致命的欠陥となった、と私は考える。これこそ歴史の進歩に逆行するものであると考える。この点では資本主義のほうが歴史の進歩に沿うものであった。

そこで私は主張したい。それはハイルブローナーの言う、「参加」を統合原理とする社会こそ民主主義を実現する社会であり、そこでは市場調整のため彼が言うように「市場に似た調整メカニズムが必要」（すなわち資本主義の存続）であるとしても、民主的な運営によって万人の納得のゆく政策が採られることになり得るであろう、ということである。ハイルブローナーのいう私的領域としての「経済という飛び地」（国家の中のスイス）の存在も、それ（「参加の社会」の実現）によって確実になり得るであろう。「参加の社会」（資本主義が基調であるとしても）こそ21世紀の社会であると考えられることは、希望的観測に過ぎないのか。あるいは逆に、悲観的観測と批判されなければならないのであろうか。